

高橋俊明氏 元愛媛県繊維産業試験場技術支援室長

愛媛県染織試験場は1922年に開設された愛媛県工業講習所を前身にもつ、歴史ある公設試験研究機関である。それ以来、名称を変えつつ、今治タオル工業の発展を技術開発、人材育成、ネットワーク形成など多方面から支えてきた。

1970年代に入り、染織試験場が大卒者を採用しはじめた第一世代が高橋俊明氏である。大阪芸大を卒業してすぐに染織試験場に入り、デザインの専門知識と独自のセンスをタオルづくりに反映させてきた。染織試験場では、①デザイン、②染色、③製織の3つの部門に各専門技術者がいるが、今回の「タオルびと」では①のデザイン部門の技術者であった高橋氏に話をうかがう。



高橋俊明氏

（「ギャラリー遊」に集う仲間が描いた高橋氏の似顔絵）



たかはし・としあき ☆ 1948年、越智郡宮窪町（現・今治市宮窪町）生まれ。1967年に愛媛県立今治南高等学校を卒業したのち、1967年大阪芸術大学芸術学部美術科（油絵専攻）へ入学。同大学を卒業後、1971年に愛媛県染織試験場のデザイン部門の技術者として着任。1986年同試験場主任研究員、2001年愛媛県繊維産業試験場技術支援室長、2008年愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター技術支援室長などを歴任し、2011年現役から退く。退職後、「ギャラリー遊」を主催。

1. 愛媛県染織試験場と今治タオル

今治タオルの歴史に染織試験場あり

今治タオルの発展を考えると、産地組織の役割を見逃してはならない。なかでも愛媛県染織試験場（以下、染織試験場）は、1922年の開設以来、タオル工業における技術開発や人材育成、産地ネットワーク形成など多方面からその成長を支えてきた。

染織試験場は、1921年11月の愛媛県令第59・60号の布達をうけて1922年に現在の今治市泉川町に設立された愛媛県工業講習所（以下、工業講習所）を前身にもつ。設立の目的はおもに2つあり、ひとつは染織工業にたずさわる技術者の養成、もうひとつは染織業者への技術指導であった。技術者の養成では、染織試験場内に織機科と色染科の2学科・各2年課程が設置され、一般教養科目と専門実践科目の修得をとおして織物に必要な基礎知識が叩き込まれた。染織試験場で学んだ人たちは、のちほどタオルメーカーや染色加工業の会社を立ち上げ、今治のタオル工業の発展においてその一翼を担っていった。


技術指導では、戦後今治がタオル生産で日本一となる技術的基盤を用意した。工業講習所が開設されたときに技師兼講師として着任した菅原利鏝^{としはる}  は、1922年に原田式小幅ドビー機を開発して紋織タオルを製織し、ついで1925年に北織式広幅ジャカード機を完成させ、現在の今治タオルの原型をつくり上げた。それまで今治で生産されたタオルは大阪の泉州タオルの模倣品にすぎなかったが、これ以降、今治のタオルメーカーではジャカード機をもちいた紋織タオルを製造するようになり、他のタオル産地との差別化を図ることに成功した。

表1 愛媛県染織試験場（現・愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）略年譜

年次	内容
1920	5月、今治市蔵敷榎町において起工
1921	11月、愛媛県令第59号による愛媛県工業講習所規則と同第60号による愛媛県工業講習所規程が制定
1922	愛媛県工業講習所開設、講習所内に機織科と色染科の2科設置
1923	菅原利鏝がタオル専用のドビー機を開発し紋織タオルを製織
1925	菅原利鏝がジャカード機による紋織タオルを製織
1934	松山市立工業学校の県立への移管とともに同校に染織科が設置されたことで、工業講習所内の2科廃止 敷地・設備拡充にともない組織が再編成され、名称も愛媛県染織試験場に改称 施設内に自動紋紙写彫機や編綴機を置いて図案部を新設し、紋紙穿孔作業を開始
1938	染織試験場伝習生規程が制定され人材育成にふたたび乗り出すが、戦争により伝習生募集を中止
1944	戦中、軍事物資供給のためいったん染織指導所に改称
1952	捺染タオル研究室を新設し、タオル捺染の研究を開始
1957	全国初のタオル自動織機を開発
1964	パイル織物用系のチーズ染晒・糊付加工技術を開発
1968	染織試験場を新築・移転（用地は田中産業株式会社が寄贈）
1969	全国初のタオル用革新織機を開発
1981	矢原織機製作所と共同で新型レピア式革新織機を開発
1984	超高密度のパイル織物製織技術を開発
1989	愛媛県繊維産業試験場に改称
2006	綿繊維からバイオエタノールを生産するリサイクル技術の開発に着手
2008	愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センターに改称
2014	繊維産業技術センターを新築・移転

参考資料：阿部武司「戦間期における地方産業の発展と組合・試験場」近代日本研究会編『経済政策と産業』山川出版社、1991年、234-235頁。愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センターパンフレット。

このように、戦前から染織試験場は今治のタオル工業が発展していく過程で重要な役割を果たしてきた。そして戦後も引きつづき、人材育成や技術開発において貢献し、さらに産地のネットワーク形成において中心的な役割を演じてきたのである。より具体的には、

技術開発や新商品開発、依頼試験・加工、開放試験室の提供、機器提供、企業訪問による技術相談・技術支援、研修生の受入指導、研究会・講習会・講演会の開催、技術情報提供などをつうじて、産地のタオルメーカーや染色加工業者、縫製業者などのタオル関連企業、四国タオル工業組合や愛媛県繊維染色工業組合などの各組合、今治地場産業振興センターや今治市役所などの公共団体などの橋渡しをおこない、産地ネットワークを形成してきた。

これらの重要な任務を遂行した染織試験場の技術者たちは、戦後しばらく、中学校を卒業してこつこつ技術を積んだ人や高校を卒業して専門技術を身につけた人が主流であったが、1970年代に入った頃から大卒者を採用するようになった。その第一世代が高橋俊明氏である。

表2 染織試験場のおもな活動

項目	内容
新商品・新技術の開発	情報分析や市場動向、業界の要望などを踏まえて各時代に即した新商品・新技術の開発（デザイン企画技法、安心安全な加工、環境に配慮した加工、パイル抜け防止技術の開発、製織技術の開発、生地開発、織機・試験機器の改良など）
人材育成	中小企業技術者養成（企業からの要望に応じた研修生の受入、講習会の実施など）
技術支援	技術上の問題点や技術開発・製品開発のための相談・支援
依頼試験	糸や布などの各種試験・分析、試織・染色・デザインなどの依頼加工
開放試験	新製品開発支援のため各種試験機器および測定器を設置し、企業からの設備利用に対応

2. 幼・少・青年時代

高橋氏は、1948年、宮窪町役場に勤務していた父親と農業を営む母親との間に長男として今治市の島しょ部・大島の宮窪町早川に生まれた。兄弟は、下に弟がひとりいる。1955年に宮窪町立余所国小学校に入学したが、一（ひと）クラスしかない小さな学校だったこともあり、子供ながら「町に出たい」という想いが沸々とあった。その想いを行動に移したのは、小学校3年を終えたときである。両親を説得し単独で島を離れ、今治市内の父方の叔母の家で下宿生活をはじめた。1958年4月、今治市立常盤小学校4年に転入し、その後今治市立日吉中学校に入学した。戦後のベビーブームの影響もあり、当時は40～50人編成のクラスが12もあった。



1歳の頃の高橋俊明氏



美術の楽しさに目覚めた頃

（写真：高橋俊明氏提供）

美術に開眼したのは中学校時代である。美術部に入って描いた絵が入選し、これを皮切りに数多くの展覧会に応募するようになった。結果は、負け知らずの百戦練磨。絵の道に進むことを決意する。1964年に愛媛県立今治南高等学校に入学し、もちろん美術部に所属した。高橋氏が美術に魅了されたのは、中学・高校の恩師の影響もある。とくに高校時代の美術の先生には、たくさんのかたを教わった。デッサンの描き方など技術的な指導のほか、将来を見据え

たアドバイスもらった。たとえば、「目先のことを考えるな、絵の道に進む決意があるなら時間を惜しんでデッサンしなさい」、「大学に入ったら、誰にでも優しい先生より気難しい先生に師事しなさい」など、のちの高橋氏の行動の指針になっていく。高橋氏は、いつしか恩師のような高校教員になりたいとおもうようになり、大学に進学した。

まずは大阪芸術大学を受験、ついで東京の芸術大学も受験する予定だったが体調不良のため受験を断念し、結局大阪芸術大学芸術学部美術科（油絵専攻）に入学を決めた。高橋氏は、大学の目の前にあった3畳一間の学生寮に入り、油絵を描く毎日を過ごした。寮生活では、朝早い高橋氏が夜遅い先輩たちを起こすのが日課であり、先輩たちに重宝された。創作活動では、京都の画廊で3人展を開催したり、地元今治の画廊で初の個展を開いたりした。



大阪芸術大学時代



染織試験場に入所した頃

（写真：高橋俊明氏提供）

大学卒業後は高校教員を目指していたので、予定どおり愛媛県の教員採用試験をうけ、見事合格した。しかし、合格の知らせが届く直前、高橋氏も予期しなかった出来事が起こった。染織試験場から直接高橋氏に染織試験場の採用試験をうけてほしいとの依頼があったのである。染織試験場では突如1名の欠員が出ていた。欠員の理

由は、他県出身の技術者が研修のため京都の染織試験場に派遣されたまま職場を移ってしまったのである。このような経緯から、染織試験場では、できれば地元出身の技術者の採用を希望していた。

染織試験場の合否通知が教員受託手続きのあとだったこともあり、高橋氏は採用試験を受けるか否か、たいへん迷った。教員になるか技術者になるか、大きな人生の岐路に立たされた高橋氏であったが、ある理由から染織試験場の技術者の道を選んだ。ある理由とは、転勤がないということだった。

染織試験場の採用試験にも合格し、1971年4月、技術吏員・技師という肩書きで染織試験場に入所した。その傍ら、いままで培ってきた油絵のスキルを生かし芸術活動にも力を入れた。染織試験場の近くに家を新築してアトリエをつくり、知人たちに声をかけて油絵グループを結成し、アトリエを活動の拠点として提供した。また、勤労者や若者を対象とした公設の絵画講座の支援もおこなった。そのおかげもあり、充実した青春時代を過ごすことができた。

染織試験場での初任給は、技術者手当を入れて39,800円だった。当時のサラリーマンの平均月収が7~8万円だったので、決して高い給料をもらっていたわけではない。芸大卒ということもありタオルメーカーから採用の勧誘も多々うけたが、それを断って染織試験場の技術者を選んだのは、転勤がなかったことにくわえ、公務員をしていた父親の背中をみていたからでもある。（次号につづく）

